初代飯塚桃葉の蒔絵作品（その1）

―印籠二合と脇息一基―

永島明子

飯塚桃葉（とうよう）は印籠蒔絵師として名を馳せ、阿波徳島藩御用蒔絵師としても活躍した江戸の名匠である。近年、多方面の研究[1]から、その事跡と代別が明確になってきた。中でも『阿波蜂須賀家文書』に含まれる二代飯塚桃葉提出の飯塚家に関する『成立書并系図共』を活用した大橋俊雄氏の論考[2]では、初代、二代に関する詳しい事績が報告され、桃葉研究は飛躍的展開を見せた。それによれば、元の名を源六といった初代飯塚桃葉は、宝暦十四年（一七六四）に徳島藩主蜂須賀重喜（一七三八～一八〇一）に召し出され、桃葉と改名し、観松斎知足の銘を仰せ付けられ、明和六年（一七六九）の重喜の隠居後も隠居と藩主治昭の両方に仕えて天明七年（一七八七）に剃髪、寛政二年（一七九〇）に病死している。

多くの「桃葉」「観松斎」銘のある作品の中から初代桃葉（以下単に桃葉と言う場合、初代を指すものとする）の作品を同定する作業は、早くは一九六四年発表のベアトリクス・フォン・ラーゲ氏の研究[3]の中で、主に花押の比較を通してなされている。その後、大橋氏により、紀年銘と作者銘を伴い近代の蜂須賀家の売立目録の図版と同定される作品が確実な基準作として示された[4]。即ち、明和八年（一七七一）作の根津美術館蔵「百草蒔絵箪笥」と安永四年（一七七五）作の宮内庁三の丸尚蔵館蔵「宇治川蛍蒔絵料紙箱・硯箱」である。また、蒔絵師の銘を軸に蒔絵研究を進める高尾曜氏の独自の分類からも桃葉の落款の標準が示された[5]。こうして作品の仕分けが進むにつれ、文献上[6]で語り継がれた桃葉の卓越した技量が、実物で確認されるようになった。

本稿は最近筆者が目にする機会を得、これら先学の成果に鑑みて桃葉の作と見られた作品三点を紹介する。

一、笑靨櫻獦子鳥（ここめざくらあっとり）蒔絵印籠　「観松斎」銘　一合（図版2）

京都国立博物館蔵（平成十四年度購入）

縦八・二cm　横六・四cm　厚一・七cm

（附）　木地山葵（わさび）蒔絵饅頭型根付　「桃葉」銘

径三・八cm　厚一・八cm

木製、左右に紐通しを付け、蓋と底の甲を盛った、四段の印籠。口縁と合口部の金地を除く総体を詰梨地とし、表裏にわたり金銀高蒔絵、金付描、描割で築山と小手毬に泊まる獦子鳥を描き、金、青

金の研出蒔絵で霞を添える。底面に「観松斎（初代花押）」の金平蒔絵銘（図版3）。根付は、木地に金青金高蒔絵、付描、描割で山葵を一株描く。底に「桃葉（二代？花押）」[8]の金平蒔絵銘（挿図1）。

二、豆藤小陵鳥蒔絵印籠　「観松斎」銘　一合（図版4）

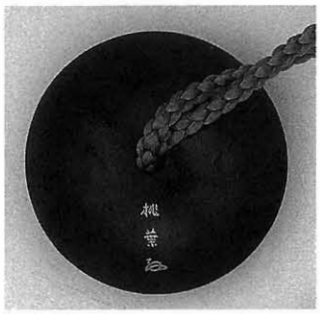
京都国立博物館蔵（平成十四年度購入）

縦八・二cm　横　六・二cm　厚一・六cm

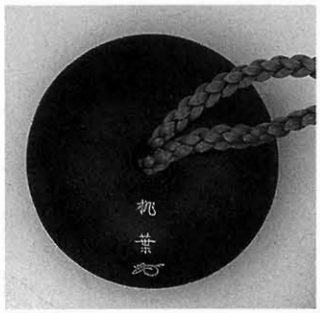
（附）　木地楓蒔絵饅頭型根付　「桃葉」銘

径三・五cm　厚一・六cm

木製、隠し紐通し、蓋と底の甲を盛った、四段の印籠。金沃懸地に金銀高蒔絵で、表裏にわたり藤に泊まる小陵鳥を描き、青金粉と金粉の研出蒔絵で霞を添える。内部は詰梨地、口縁と合口部は金地。底面に「観松斎（初代花押）」の金平蒔絵銘（図版5）。根付は、木地に金青金高蒔絵、付描、高蒔絵の漆上げに用いた朱漆を用いて、紅葉を描く。底面に「桃葉（二代花押）」の金平蒔絵銘（挿図2）。



挿図1
木地山葵蒔絵饅頭型根付
平蒔絵銘「桃葉（二代？花押）」



挿図2
木地楓蒔絵饅頭型根付
平蒔絵銘「桃葉（二代花押）」

右の印籠二点はそれぞれ『画図百花鳥』の巻四「九十五　笑靨櫻獦子鳥」（挿図3）、巻三「六十　豆藤小陵鳥」（挿図4）を下絵とする。[9]享保十四年（一七二九）初版の同書は、狩野探幽・探雪門下の俳人、藤原石中子守範（生没未詳）が、師の「百花鳥」を縮写模刻し、画と題を一とする発句、漢詩、和歌を諸家に募って、彩色の説明を添え、江戸で公刊した五巻五冊本である。[10]桃葉の生前には二度の求版に加え、パロディー版も出ており、没後も求版を重ねて幕末まで刷り継がれるほど広く流布した絵俳書であった。

『画図百花鳥』を下絵にした印籠は数多く、古満久蔵安匡（一七五八没）による通称「ギフ・インロウ」についてはジュリア・ハット氏[11]が、その他の蒔絵師の印籠についてはハインツ・クレス氏[12]がそれぞれ詳しく報告している。特に、世界各国のコレクションを調査し数万件のデータを基に印籠研究に専念するクレス氏は、古満安匡に次いでこの版本を基とする印籠を多産した蒔絵師として桃葉を挙げ、十六点の図版を掲載している。氏の報告後初公開となった静嘉堂文庫美術館蔵の印籠コレクションにも、桃葉によるこの系列の印籠二点[13]が含まれるように、類品はまだまだ存在するだろう。また、個人蔵「卯の花時鳥蒔絵花紙台」[14]などを見れば、桃葉が『画図百花鳥』の活用の場を印籠に限っていなかった様子が窺えて興味深い。桃葉が徳島藩と関わりの深かった木挽町狩野家、栄川院典信による下絵を指定されて仕事をしたことが作品の落款や文献資料から明らかにされているが、[15]十八世紀前半には、図案帳として手軽に利用できる狩野派の版本が広く流布していたことも指摘されてよかろう。

図版で比較し得る限りにおいてではあるが、一連の『画図百花鳥』印籠の中にあって、ここに紹介した二点は、用いられた技法や図のおさまり具合から、最も華やかな出来栄えの部類に属するように見受けられる。前所蔵者にこの二点をもたらした人物は残念ながら既

に亡く、それ以前の来歴は全く不明である。従って、二代桃葉作と見られる根付をいつから伴うのかも判らないが、最近になってこれだけの銘の組み合わせを二組も揃えるのはどちらかと言えば難しい。故人が集めた印籠の中で、この二点のみが揃いの江戸時代の茶地花入菱文様裂による袋に入っていたので、あるいはこれが来歴の手掛かりとなるであろうか。同種の袋を伴う観松斎銘の印籠があればご教示願いたい。

三、寒蘭蒔絵香脇息　「観松斎」銘　一基　個人蔵（図版6）

脇息　幅二三・九cm　奥行一六・七cm　高二五・四cm

香炉　径九・三cm　高七・八cm

木製、楕円形底板の縁を残した内側に胴張筒型の側板を立て、幅広の前後面に縦木瓜形の孔を大きく穿ち、上部に蓋受けの枠を固定する。蓋は皮革と緋毛氈を張り合わせた中に綿を詰めた布団とする。底板中央に円形窪みを設け、阿古陀香炉を置く。香炉は木製、内銀張り、銀縁で、銀製菊花形透かしの火屋を乗せる。内に香炉口と同形の銀製花霞文透かしの三脚付火床を落とす形状が特異である（挿図5）。脇息香炉とも外面には金粉と微細な銀粉を用い、内面には金粉のみを疎らに用いて淡い梨地を作り、金銀の研出蒔絵に描割と付描を使い分けながら、[16] 脇息胴部の左右には叢生する寒蘭を、一方は静止する姿（挿図6）、他方は風に揺れ動く姿（挿図7）に描く。香炉胴部には蘭の花と蕾を散らす。脇息の底板縁、蓋受け枠縁、刳形縁は金地。脇息の静的な蘭を描いた画面右下に「観松斎（初代花押）」の金平蒔絵銘（図版7）。蓋表に「御きうそく」の墨書銘のある桐製外箱は当初からの附属品と思われ、名称はこの表記に従って

挿図3　『画図百花鳥』巻四
「九十五　笑靨櫻猶子鳥」

挿図4　同　巻三
「六十　豆藤小陵鳥」

（挿図3および4は、註10『関東俳諧叢書』第十九巻より転載）

脇息とした。

印籠に比すれば大画面に、研出蒔絵の名手と言われる桃葉の力量が存分に発揮され、蘭の動静がそつなく描き分けられている。この構造の調度は類例がなく、はじめは袖に香を燻らせることのできる寄掛と考えた。しかし、香道具に詳しい京都の香の老舗、松栄堂の畑正高氏からのご教示によれば、伝統的な阿古陀香炉に火床を落とし込む形式は見当たらない。狭い刳形から火箸を用いて火屋を取り除き火を整える所作を考えても、火種は火床の上にあったと考えるのが自然で、とすると、香を炷くよりも暖を取るのにより適した構造ということになる。火床の透かし文様は燃え殻を下に落とすための格子代わりで、火があれば香も炷いたであろうが、本来は手焙としての機能を与えられた調度であろう、とのことであった。阿古陀香炉が入る構造を表現して「香脇息」と名付けた。いずれにしても、特注品であろう。全体にやや小振りであるため、蜂須賀家の姫君のために調えられた脇息であったかもしれない。

以上、初代飯塚桃葉による蒔絵の

挿図５　寒蘭蒔絵香脇息「観松斎」銘　個人蔵：解体図

挿図６　同：部分

挿図７　同：部分

優品三点を紹介した。桃葉の足跡を辿る一助となれば幸いである。作品調査と写真掲載を快くご許可下さった脇息のご所蔵者にこの場を借りて御礼申し上げる。次回は、制作時期をある程度限定できる新出の作品を報告する。

〈註〉

1 Von Rague, Beatrix. "Materilalien zu Iizuka Toyo, seinem Werk und seiner Schule". in *Oriens Exrremus*. Jahrgang 11. Hamburg, 1964: pp.163-235.
中村正義 『写楽』1 ノーベル書房 一九七〇年
大橋俊雄 「飯塚桃葉関係史料—飯塚家の成立書を中心に—」『漆工史』第一五号 漆工史学会 一九九二年
大橋俊雄 「初代飯塚桃葉の作品」 武田恒夫先生古稀記念会編『美術史の断面』 清文堂 一九九五年
Kress, Heinz. "Inro Motifs: Part IV". in *Netsuke Kenkyuukai Study Journal*. Volume15. Number 3. Fall 1995: pp.22-41.
小川裕久「飯塚桃葉と徳島藩」『近世御用蒔絵師の系譜』(特別展図録) 徳島市立徳島城博物館 一九九六年
2 徳島市立徳島城博物館『近世御用蒔絵師の系譜』(特別展図録) 一九九六年
3 前掲註1、大橋、一九九二年
4 前掲註1、Von Rague, 1964
5 前掲註1、大橋、一九九五年
6 高尾曜「近世蒔絵師銘鑑—印籠蒔絵師を中心に—」『古美術緑青』17号 マリア書房 一九九五年 (一〇五頁)
天明元年(一七八一)刊の『装劔奇賞』第六巻
弘化二年(一八四五)～嘉永三年(一八五〇)頃成立、明治三十七年(一九〇四)刊の『古畫備考』二十六 名畫
7 明治二十七年(一八九四)刊の『工藝鏡』巻二 漆器工蒔繪工
笑靨櫻の名称は現代の辞典類ではユキナヤギと同義とされるのに対し、図は現代で言うところのコデマリである。ここでは江戸時代の図の題に従ってこの名を付した。
8 現時点では二代の銘と考えられている。以下の銘と同一。
前掲註1、Von Rague, 1964 における「D3」類。ブリュッセル王立歴史美術博物館蔵ミショット・コレクションの印籠(収蔵番号M1131)。
前掲註1、徳島市立徳島城博物館、一九九六 図版Ⅳ—45徳島市立徳島城博物館蔵「蔦蒔絵文箱」。(高尾曜氏にご教示いただいた。氏によれば北欧のコレクションにも同じ銘を持つ印籠が一点ある。)
9 高尾曜氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
10 以下、『画図百花鳥』については左記を参照。
加藤定彦、外村展子編 『関東俳諧叢書』第十九巻 絵俳諧編③ 青裳堂書店 一九九九年
11 Hutt, Julia. "The Gifu Inro. A Set of One Hundred Inro by Koma Yasutada". in *Transactions of the Oriental Ceramic Society*. London 1988-1989: pp. 24-25.
Hutt, Julia. "Fleurs et Oiseaux: Quinze 'inro de Gifu' dans les Collections Baur". in *Collections Baur*. No. 49. Geneva. 1990: pp.3-31.
12 前掲註1、Kress, 1995
13 静嘉堂文庫美術館『初公開印籠根付コレクション江戸のデザイン展』二〇〇〇年
図一二七「梅竹に鶯蒔絵印籠」は恐らく巻二「四十 梅鶯」と巻三「五十三 李紅雀」の統合、図一二八「蘭に鶺鴒蒔絵螺鈿印籠」は巻四「芝蘭鶺」に対応する。
14 前掲註1、徳島市立徳島城博物館、一九九六年 図版Ⅳ—18。『画図百花鳥』巻四「七十三 卯花杜鵑」に対応。
15 前掲註1、小川、一九九六年
16 葉には、密に蒔いた金研出蒔絵に描割、疎らに蒔いた金研出蒔絵に金付描、疎らに蒔いた銀研出蒔絵に金付描の三種の組み合わせを、花弁にも金研出蒔絵に金付描、銀研出蒔絵に金付描の二種を使い分け、細い葉や花弁がやわらかに裏返るさまを色調豊かに描いている。